

『自由研究でいこう!』

村田誠治

チーン、チーンという良く響くきれいな金属音。

八月三十一日。中学校に入って初めての夏休みも、何の問題もなく過ぎ去ろうとしている。新学期の準備は万端。最後に念のため、俺は夏休みの課題を確認する。数学、英語、国語の課題……友人の秀才・古山君にむりや協力させて終わらせた。読書感想文……去年書いた感想文を微妙に手直して終わらせた。完璧!

とっていたら、夏休みの課題を箇条書きにしたプリントの最後の一行で目が止まった。

『自由研究』

ジュウケンキュウ?

チーン、チーン、という金属音。

「あーーーーー!! 忘れてたーーーーー!!」

自由研究。確か俺は、『アサガオの成長の観察』というテーマにするつもりだったんだ。

つか、中学生にもなってそのテーマはどうよ？ といった感じだが。俺は電光石火の速度で机の上から筆記用具をつかむと、部屋を飛び出して庭に置いてあるプラスチック製の植木鉢に所に走る！ ……案の定、アサガオはすっかり枯れていた。

まずい、これはまずいぞ。もう夏休み最終日の午後六時だ。今から間に合う自由研究だと……？ そんなもの、あるのか？

俺は急いで自分の部屋に戻る。何かネタになるものはないか、探さなければ！

部屋の中に戻って冷静に考えてみると、これはもう自分一人で問題を解決することは無理じゃないか、誰かの協力を仰ぐべきではないか、と思えてきた。

チーン、チーン。

「理佳<sup>りっか</sup>！ ちよつと手伝え！」

妹、理佳の部屋のドアを蹴破るような勢いで開け、唐突に言う。

ドアを開けてみると着替え中でしたという

ラブコメチックな展開はなく、楽器のトライアングルを金属棒で叩いているという間抜けな姿をさらしている我が妹がいた。チーン、チーン、という金属音が鳴る。

「トライアングルなんてやってる場合じゃないぞ、マイシスター！ 愛すべきお兄様の大ピンチだ、問答無用で手伝え！」

「な、何なのよ、お兄ちゃん！ あたしは休み明けの演奏会の練習をやってるんだから、邪魔しないでよ！」

理佳は小学校のブラスバンド部に所属している。

「とういか理佳、六年にもなって演奏楽器がトライアングルなんて、お前、遠まわしに『役立たずだから何もしないでね☆』って言われてるんだよ」

「う、嘘！ 部長はトライアングルは重要な楽器で、あたしを信用して大役を任すって言うてくれたのに！ あたし、感動してトライアングルの歴史や由来まで調べたのに！」

こんな嘘に引つかかるお人好しで、世の中、  
渡っていけるのか。お兄ちゃんは心配だぞ。

マジ泣きしている妹の肩に優しく手を置き、  
「てめえのことなんざ、どうでもいい。とにかく、俺の自由研究を手伝え」

「ひどっ！ お兄ちゃん、優しさのかけらもないよ！」

「で、理佳は自由研究は何をやったんだ？」

「話、流してるし……。私はこれ」理佳は薄い膜のようなものが、標本のように何枚か並べられて貼られた箱を見せる。「日光が人の皮膚に及ぼす影響の研究。こつちが引きこもりの文学少女・日高さんの皮膚で、こつちが沖縄に旅行に行つた柴田さんの皮膚だよ」

「気持ち悪っ！ そんな研究、日焼け止め作つてる会社にも持っていけ！」

「日焼けしてない皮膚をはがすの、大変だったんだよ。日高さん、泣いてたもん」

「そんな報告、聞きたくない！」

くそ、理佳のは参考にならないか。

「仕方ない、兼ねてからあたためておいた企画を使おう。自由研究のテーマは、『幼女の体の研究』！　というわけで理佳、手伝え！」

「変態っ！」

殴られました。

「一部の人間は泣いて喜ぶ研究内容なのに。

けど、もう夕方だから、昆虫採集も無理だし、

郷土史を調べたりするのも無理だし……」

落ち込む俺に、理佳が言う。

「だったらお兄ちゃん。一ついい方法がある

よ」

「いい方法？」

夏休み明けの登校。俺が提出した自由研究

は、『トライアングルという楽器の歴史と由

来について』。情報源は、すべて理佳。

ちなみにその後、俺はクラスメイトの前で

自由研究の発表として、トライアングルの演奏をさせられた。

チーン。